飛鳥寺の調査

―第152-2・152-3次

第152-2次調査

個人住宅建替えによる史跡飛鳥寺跡の現状変更にともなう発掘調査である。調査地は現飛鳥寺東辺の南北道路と飛鳥坐神社から西へのびる東西道路がＴ字に交わる東南角、飛鳥寺講堂の東北にあたる。1995年には同一敷地内において調査をおこない、柱穴の可能性も考えられる土坑３基を検出している（飛鳥寺1995-1次『藤原概報26』）。敷地北端に南北２ｍ、東西7.5ｍの調査区を設定した。調査面積15㎡。調査期間は2008年７月15日～18日。

基本層序　現地表面から、住宅解体にともなう撹乱層、旧表土である明褐色砂質土層、灰褐色砂質土層、多量の遺物を含む暗褐色土層となり、現地表下50～60㎝で遺構検出面である黄褐色粘質土層となる。

検出遺構　検出した主な遺構には、瓦敷面、東西溝がある。瓦敷面SX2000は、調査区北東部で検出したもので、南北80㎝、東西３ｍにわたって確認した。調査区の東および北へさらに広がるものと考えられる。黄褐色の粘質土（花崗岩風化土）により上面が覆われていた。瓦敷の西端は接地面にそってわずかに西に傾斜する。南端は、東西溝SD2003の北側に接し、東西２箇所に穴状の掘り返し（SX2001・2002）を受けている。SX2002からは飛鳥寺Ⅰ型式の軒丸瓦が１点出土した。

東西溝SD2003は、調査区の南半で検出したもので、幅50㎝、調査区西端で深さ50㎝。調査区西端付近で南に折れていた可能性がある。部分的に遺存する石から両側に石を据えていたものとみられるが、南側石は長さ40㎝ほどの塊石を内側に面を揃えて据え、北側石は20㎝ほどの小ぶりなものとする。このことから、調査区の南方に基壇状の施設が存在し、SD2003はその北辺の雨落溝であった可能性がある。また、調査区西壁の断面観察によりSD2003は再掘削され、２時期あるものと考えられる。このほか、SD2003の北岸に、柱穴状の穴SX2004などを検出した。

これらの遺構を覆う暗褐色土層には、中世前半の土器が含まれる。また、崩落したSD2003の南側石脇からも中世の土師器皿が出土した。一方、SX2001・2002からは、奈良時代から平安時代にかけての土器が出土しており、瓦敷SX2000および石組溝SD2003は、中世前半に埋め立てられたものと考えられる。

出土遺物　創建期の軒丸瓦を含む多量の瓦、土器、金属製品がある。軒丸瓦は、いずれも素弁の飛鳥寺Ⅰ型式３点、Ⅵ型式１点が出土し、平瓦632点（47.07kg）、丸瓦184点（25.71kg）、計816点出土している。

まとめ　以上のように、今回の調査は、小規模であるにもかかわらず、古代の飛鳥寺に関わる遺構が良好な状態で遺存することが判明した。また、中心伽藍東北部における基壇建物の存在の可能性など、あらたな知見を得るものとなった。

（次山　淳）

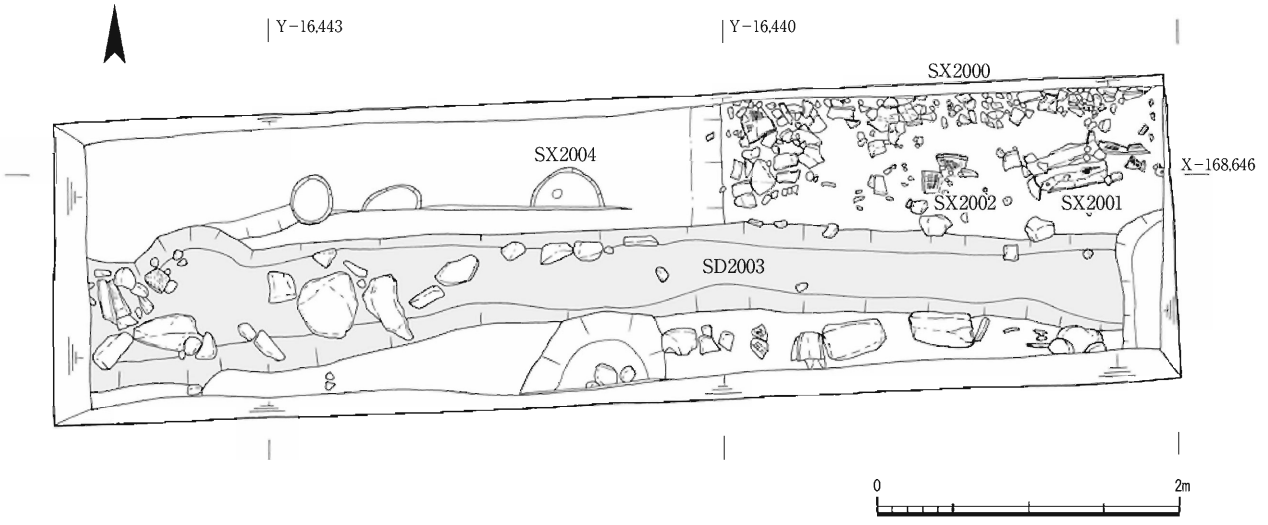

図95　第152-2次調査遺構図　1：50

第152-3次調査

個人住宅建築による史跡飛鳥寺跡の現状変更にともなう発掘調査である。

調査地は、現飛鳥寺駐車場の北側、飛鳥寺回廊東北隅の東に隣接する。敷地南端に、南北1.5m、東西8.5mの調査区を設定した。調査面積13㎡。調査期間は2008年７月23日～25日。

基本層序　現地表面から、コンクリート等を含む埋め立て土、暗褐色砂質土、黄褐色粘質土、橙褐色砂質土、明褐色砂質土、灰褐色砂質土となり、橙褐色砂質土以下が遺構検出面となる。遺構検出面は、調査区内で西から東へ緩やかに傾斜し、西端で地表面から60㎝、東端で120㎝を測る。後述するように、橙褐色砂質土は大きく削平を受けているが、堆積のあり方から、この傾斜はある程度旧地形を反映したものと考えられる。

検出遺構　この遺構面上で検出した遺構は、南北素掘溝１条、石組遺構１基、土坑１基にとどまる。南北素掘溝SD2011は、調査区西端で検出した。幅40㎝、深さ50㎝で、ビー玉や石炭等が出土したことから近代以降のものと考えられる。石組み遺構SX2012は、直径40㎝ほどの平面円形に小礫を詰め込んだものでSD2011の埋土を掘り込む。土坑SK2013は、調査区東北端で検出した。層位と出土遺物から、近代以降のものと考えられる。

また、遺構検出面からの遺物の出土は極めて乏しいものであった。したがって、飛鳥寺にかかわる古代の生活面は、近代以前に削平を受けたものと考えられる。

出土遺物　出土遺物は、全体に乏しく、包含層中から出土した少量の古代の瓦（平瓦44点、丸瓦１点）、陶磁器などの土器類、SD2011埋土より出土した金属製簪、ビー玉、石炭などがある。

まとめ　今回の調査地の西隣接地では、飛鳥寺第３次調査および明日香村教育委員会による再調査で、北面回廊基壇の一部を検出している（奈文研『飛鳥寺発掘調査報告』1958、明日香村教育委員会「2005-8次　史跡飛鳥寺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報平成17年度』2007）。

しかしながら今回の調査範囲では、削平により古代の遺構の遺存状況がきわめて悪く、回廊外周の遺構等を確認することができなかった。第３次調査の遺構実測図では、回廊東北隅の推定東辺ラインよりも西側に、回廊基壇の東への落ちが表現されており、削平が回廊基壇東辺（東面回廊）まで及んでいた可能性がうかがわれる。

一方、現在は平坦地となっている現飛鳥寺東辺の南北道路付近の地形が埋め立てによるもので、本来は南北方向の谷状の地形であったものと推定され、飛鳥寺境内地の旧地形を復元するための材料が得られた。　（次山　淳）

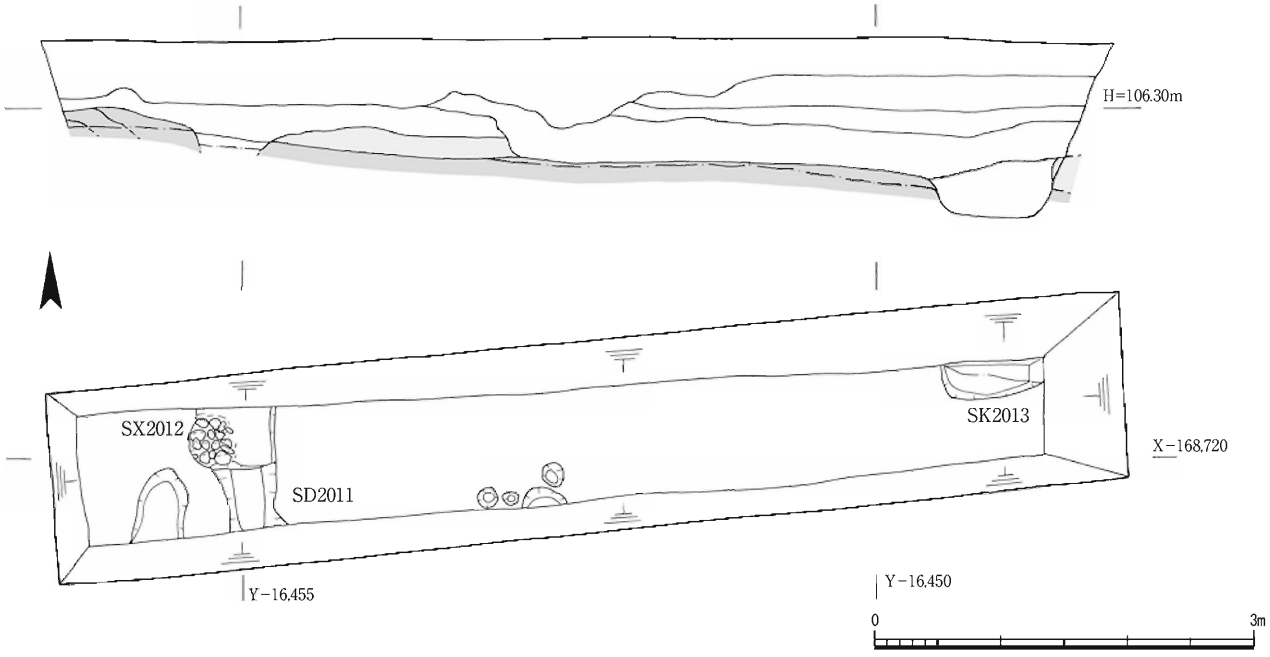

図96　第152-3次調査遺構図・北壁断面図　１：60